

昨年秋、小学校の図工展に足を運んだ。一年生の長女が出展した作品は、「みんなでパレード」という題の「びん人形」である。不要になった酢や酒、飲料の空き瓶を大小重ねた上に紙ねんどを貼り付け、絵の具で人型に仕上げたものだ。色鮮やかな衣装をまとい好き勝手なポーズをとった人形たちは、無邪気なだけに力強いアートとして見応えがあった。

子供達にかかると、廃品となるはずのモノが楽しい作品になる。牛乳パックの角を縦に切り、底の対角線を内折りしたところをぱくぱく動く口に見立てる。あわせて、好きな動物などの顔と体を色紙で張り付け目鼻をつけると、紙パック人形のできあがり！破れかけたスカーフも、娘が羽織ると少女戦士のマントにはや変わりする。子供の世界では、遊び心をくすぐるリサイクルの智慧が当然のように氾濫しており、感心させられる。

一方、大人の世界では...と考えると、大阪の街の中でも、いくつか、資源を有効に再利用する動きが定着しつつある。例えば、近代建築物。維持保存が大変なため、つぶされる予定であった銀行仕様の建物にほれ込んだ有志が、オーナーに直訴して借り受け、お洒落なウエディングレストランとして再生させた。他にも近代建築物の改修による、本格的なフランス料理店、洋菓子屋や雑貨店、ギャラリーなど、誰でも滞在を楽しめる「開かれた場」が、船場のビジネス街周辺に増えてきた。

大阪の町家や長屋のよさを見直し、戦前から残るまち並みを維持保存するための活動も盛んである。長屋の空き室に、アーティストが移り住んだり、路地を舞台にしたアートイベントが開催されたりして、マスコミに取り上げられ注目を浴びたことで「こんな古いまちのどこがいいんや」と言っていた住民が、改めてわがまちのよさを再認識している。

ところで昨年、長崎市で開催された、まち歩き博覧会「さるく博」では、市民ガイドにより素顔の街を楽しく体験できるメニューが満載であった。市民手作りのマップとともに街のエピソードを掘り起こし、来客をもてなす精神と技術を育成した成果が大きく、長崎の資源を最大限に活用したイベントだった。

大阪でも今後、イベント計画の際は、新たなパピリオン建設でなく、屋根のないパピリオンとして、持ち腐れつつある文化資源やヒトの発掘、育成、活用などソフトに力を注ぎ、予算をつける風潮をもっと育てるべきである。

大人の展覧会・イベントこそ、子供に負けないぐらい、資源の可能性を見出し有効利用する智慧や創造力の発表の場であってほしい。

(大阪ガス エネルギー・文化研究所
主任研究員 栗本智代)